

【第3学年のまとめ】

1. 学年の取組

3学年においては、中学年の目指す姿『相手の考え方と自分の考え方を比べて考える』に迫るために、まずは自分の考えを持ち、その上で友達の考えと比べて考えるには、教材文のどの場面で議論したらいいのかについて考え毎時間の授業を展開してきた。

本学年の児童は、男女ともに仲が良く、各クラス全員でレクをして遊んだり、友達が困っていたらすぐに助けたり協力したりできる児童が多い。その反面、注意の言葉がきつかったり、言い方が強かったりして言い争いや喧嘩になってしまうことがある。そこで、よりよい友情関係を築くためには、どうすることが相手のためになるのかを考え、互いに高め合っていけるような関係の大切さに気付くようにしたいと考えた。

本時では、仲の良い友達に対して自分ならどうするかと自分事としてられ、周りの友達と意見を比べ合う手立てとして「心のものさし」を取り入れた。葛藤場面において、ネームプレートを使い自分の意思表示をさせることで、クラス全体の様子や、誰がどんな思いを持っているかが視覚的に分かりやすだけでなく、微妙な位置の違いからさまざまな考え・思いを引き出すことにした。この方法は、意図的指名もしやすい。その中で、それぞれの立場の考えに質問などをさせ、考えを深めた。また、展開部分の後半では、はじめに思った位置から変化しネームプレートを動かしたい児童がいれば動かさせて、どんな理由から動かしたのかを聞き、「本当の友達」についての考えをより深めた。

学年で1時間の授業について検討を重ね、各担任による先行授業を行った。授業者は客観的に見ることができ、学年での授業の振り返りを行うことで、自分の考えを書かせる場面や発問を精査したり、児童の考えを深める場面を絞ったりすることができた。同じ教材文を使った授業でも迫り方により、児童の反応が違うことも実感できた。

2. 授業実践について

主題	本当の友達	内容項目【B-(9) 友情、信頼】
本時のねらい	友達のことをよく考えて、友達を大切にしようとする態度を養う。	
教材名	『なかよしだから』（出典 新しいどうとく3 東京書籍）	
授業者	3年2組 中嶋 玲子	



【授業の流れ】

- ①算数の宿題を忘れ、なかよしの実さんに頼ろうとする場面
ここでは、仲良しの実さんに頼ろうとする気持ちを考えさせ共感させる。
- ②「なかよしだから、なお教えられないよ。」と言われた場面
ここでは、「実さん」の立場になり、教えるか教えないか、自分が支持する考えとその理由を明確にさせる。
- ③家に帰って考える場面
ここでは、「ぼく」にとって「実さん」はどんな友達かを、家に帰った「ぼく」がどう考えたのかを考えさせ、本当の友達とは何かを考えさせる活動につなげる。



②

「なかよしだから、なお教えられないよ。」と言われた場面

「実さん」の立場になり、自分だったら教えるか教えないか、心のものさしを使って考えた。その後、質問や意見交換をし、心情の変化があった児童は貼りなおした。



児童のワークシートより

本当の友達とは…

- ・いつも一緒に遊んでくれる人。
- ・いつもそばにいてくれる人。
- ・はげましてくる人。
- ・助けてくれる人。
- ・たよりになる人。
- ・なぐさめてくれる人。
- ・何かあったらすぐきてくれる人。
- ・本当の友達は教え合う。でも、時には教えてはだめなこともある。その時はしっかり注意できる友達。
- ・本当の友達は、やさしくて分かってくれて、はっきりと注意してくれる友達。
- ・ぼくが本当の友達だと思った人は、自分のことを考えてくれる人だと思います。
- ・本当の友達は、ちゃんと注意までしてくれて、自分のことをよく分かっている友達。
- ・たまにはおこったりすることもあるけど、自分のことを色々分かってくれる人。

など

3. 成果と課題

【成果】

- 本校の中学年における、目指す「考え、議論する姿」は、「相手の考え方と自分の考え方を比べて考える。」である。その姿を目指すうえで、「心のものさし」は有効な手立てといえる。
- なぜなら、「心のものさし」の活用によって、意見の可視化や共有化、それによる意見の比較ができるからである。そしてそれは、単なる二者択一による比較ではなく、心情における微妙な差異の表出も可能とする。
→本時でいえば、「自分が実さんなら、宿題を教えるか。」という発問に対し、例えば「教えない」という意見において、「絶対に教えない。」という立場も、「多分教えない。」という立場も可視化、共有化することができる。

【課題】

- ▼その上で、比較した後、どのように考えを深めていくかという点のさらなる研究が、今後の課題である。教師による「切り返し」であったり、子供同士の質問や意見交流であったりが想定される。
- ▼教師の「切り返し」という点では、子供のどんな意見に対し、どう切り返していくかが重要となる。その授業におけるねらいを明確にもつこと（教材研究）、児童からどんな意見が出るかの予測（児童理解）の両面が必要だと考えられる。